九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「文学研究」の思い出

目加田，誠

https://doi.org/10.15017/2332800

出版情報：文學研究. 65, pp.17-22, 1968-03-30. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

「文学研究」の思い出

目加田誠

私は昭和八年、当時の第三高等学校から九大に転任して、そのまますぐ中国に留学し、昭和十年帰朝して、中国文学講座をうけもったが、そのとき文学部の文学科では、以前から教官による文学研究会というものがあり、雑誌「文学研究」が刊行されていることを聞いた。新任の私は早速これに執筆を命ぜられた。当時この会の推進力は独乙文学の佐藤通次さんだったようだ。

佐藤さんの説得力はおそるべきもので、何びとと雖も叶わない。なにしろ企画性と実行力を強く兼ねているのだから。私などは全く命のままだ。ただ私が一つだけ佐藤さんのすすめに頑として従わなかったことがある。その頃、文学部の若い先生方——といっても皆私の先輩だが——の間に謡曲がはやっていたようで、佐藤さんもその熱心な一人だった。それが私に向って謡曲の稽古をすすめられる。私は元来音痴もいいところだし、第一あんな大きな声を出すのはきまりが悪くてしようがないから極力辞退した。しかし何分強い説得力だから困ってしまい、最後に一策として、小牧先生がもしお始めになるなら

私も一緒にやりましょうといった。小牧先生はそれを聞いて、「私はもうけいこしました」と、まじめな顔で言われたのには思わず吹き出し、それっきり私は謡曲に縁がないのである。

小牧先生は私の水戸高校時代の恩師である。だから九大の廊下で出あって、うやうやしく敬礼をすると、先生はちょっとあの特色あるあごをしゃくって会釈される。私はどうしても頭があがらなかった。ある時先生の茶園谷のお宅で御馳走になったことがある。佐藤さんも一緒だった。その時何かの話から先生は、「近頃宅に鼠が出てこまるので、ある夜半、私は蒲団の上に端座して、鼠に話してきかせました。ここはお前たちの来るところではないと。するとその翌夜、女中がけたたましい声で騒ぐのでなにごとかと思ったら、蒲団の中から鼠が跳び出た、というのです。それきり鼠は出なくなりました。」私はあまりおかしいから、それでは先生、のみや蠅にも通じる筈ですね、といったら、先生はあの灰色の澄んだ目をじっと動かさず、「まごころから話しかければ、通じると思います。」と答えられた。独乙文学の神秘性というのかな、と、私はつくづく感じ入った。「文学研究」にはヘルダーリーンのことをよく書かれた。ノヴァリスの「青い花」が流行るころで、私にはさっぱり解らないから、そういうと、訳本を出された先生は、ニャッと笑って、あれはわからぬものです、とあっさり言われたものだ。

当時の文学科の長老にはそのほか春日先生、豊田先生がおいでだった。春日先生は学問に、実にきびしい方だったし、豊田先生は、よく「文学研究」に書いたものを批評してくださった。当時大長老と思

ったが、今にして思えば、ただいまの私より十年もお若かったのである。

春日先生のあと、高木先生が赴任され、例の「吉野の鮎」などを掲載されたのもこの「文学研究」だった。

小野島さんは梵文学の専攻で、高木さんが酒仙と名づけられたところだが、このかたはかねて好んでいられた油山に家を建てられ、一度そこを訪問したが、山小屋風な造りで、庭先きにころがって来ている巨岩があり、これがたいそうに自慢で、これは町にもって行ったら、どえらい値打ちですぞ、といいながら、コップ酒をあふられた。小牧先生の定年退職送別会を大善寺で催した際、珍らしくほろ酔いになった小牧先生が、帰りに肩を支えられながら、童謡を唱われたのも印象が深かったが、その折も小野島さんはもう大虎で、両手両足をかかえられながら、それでもまだ、カーリダーサは、シャクンターラは、とわめき立てられた。これほど純粋な人が又とあろうか、と私は思った。このかたのリッサンハーラなどの訳はぼつぼつ「文学研究」に載ったが、遂に完成を見ずに亡くなった。惜しいことであった。後に医師から禁酒を申し渡された、ときいた両三日後、中洲河畔のビール園で出会ったから、おや、禁酒の筈だのに、というと、ビールなど酒ぢゃありませんよ、と呵々大笑された姿が目に残る。「文学研究」の会合に、可愛いい小さなお嬢ちゃんをつれて来られたこともある。

謹厳で、よくこの会の世話をされた笹月さんは、戦時中他の大学に移られ、その後、福岡女子大に来

任されたが、病気で亡くなられた。亡くなる三日前、私が見舞いにゆくと、病院のベッドにキチンと坐って挨拶されたが、その直後、手術の結果が意外に思わしくなく、私の上京中に急逝されたのである。

以上の諸先生が去られたあと、文学研究会は中山、進藤、小島諸先輩の時代となる。それに英文の前川さん、独文の末松さんのあとを高橋さん、西田さん、国語の福田さん、仏文の永田さんなど、だんだん賑やかになった。毎月研究談話会を開くことになって、会員の一人一人が毎月代る代る自分の専門の分野に関する話をする。これは後には次第に間遠になったが、戦後からかなり長くつづいた。昭和何年であったか、まだ戦後の寒々とした冬であったが、文学部の旧館二階の進藤さんの部屋でいつもの会を開き、大きな二つの火鉢に木炭をカッカとおこし、午后から日の暮れるまで語りつくし、はては祿でもない話になるのが常だが、最後にウイスキーをそれぞれ茶碗に一ぱいずつ呑んで解散となり、私は進藤さんと二人で玄関まで出たが、どうしたことか進藤さんがパッタリ倒れた。驚ろいて人を呼び、助け起そうとしたまでは覚えているが、気がつくと二人ともねかされていた。胸がワクワクとして苦しく、木炭のガスに中毒したのである。それから重い脚を曳いて家に帰ったが、あとで聞くと、福田さんはまっくらな自分の部屋の中にたおれ、末松さんは、廊下から部屋に身体を半分入れてたおれ、小島さんと永田さんは千代町あたりの電車の中でやられたということで、皆一応危険な状態であったらしい。あのまま死んでしまったら、文学研究会は総つぶれだったという、あとでは笑い話になったが、これも戦後の

物資乏しい大学生活の想い出の一つだろう。

文学研究会は、たびたび一泊旅行をした。呼子に行って、生きづくりの鯛の目玉におびえたり、嬉野の宿の女主人の美しさにまいった先生があったり、想えば楽しいことであった。こうした旅行が復活した形で、一昨年、文学研究会で、壱岐対馬旅行をしたときの楽しかった想い出は、私は生涯忘れられまい。

国文の杉浦さんの逝去はまことに痛ましかった。芭蕉研究、あるいは九州蕉門の研究など「文学研究」にたびたび書かれたが、癌ときまってから、見舞にゆくのは実にこちらが苦しかった。亡くなる一週間前、自分もすでに覚悟して、私に向っていろいろ言い残されたこともあるが、私は胸もさける思いであった。大事な仕事の一つであった岩波文庫の「奥の細道」の刊行がやっと亡くなる当日間に合って、それをいとしむように飽かず眺めて、ばったり手を放すとともに息を引きとられた。

言語の吉町さんは九州方言の研究をいつも発表された。あの性格で、往々皆をこまらせたが、ある時「文学研究」の校正で、私があまりひどい訂正をしたところ、紙片に書いて、「貴兄にあるまじき暴挙」と叱られて恐縮したことがあり、今以て私は自分のいましめとしている。

この会の世話をしつづけてもらった小原さんも退職された。対馬を一緒に旅した松浪さんも最近東京に移られた。もとより私がはじめ九大に来たころお世話になった諸先生諸先輩は、とっくに退職されて

しまっている。かつては学部で最年少であった私さえ、今年定年退職した。時代はどんどん移ってゆく。古いものは次ぎつぎに消え去るのが順序である。

今や英文の前川さん、元田さん、独文の高橋さん、西田さん、仏文の永田さん、田中さん、国文の福田さん、中村さん、春日さん、今井さん、言語の松田さん、そして私のあとに中文の岡村さん、と実に多士済々の時代となった。これから九大の文学科は新らしい気分で、めざましく盛り上ってゆくであろう。ただ願うことは、従来のこの会の、あの仲のよさはいつまでも続けてほしい。これはかねて他学科の人から、いつも羨ましがられていたことだ。こうして各国文学の教官が集まって、たがいに知識を交換しあう機会があるということは、そうどこの大学にもあることではない。また私はいつも思うことだが、会員のそれぞれ専門の分野の論文は、まず第一にこの「文学研究」に掲載することが、九大に職を奉ずるものの義務ではないかと考える。かつて進藤さんの仏蘭西喜劇に関する論文、中山さんのチョウサーの研究、前川さんのワーズワースの研究、永田さんのルソーの研究、高橋さんの文芸論、をはじめ、そのほか各教官が皆この誌上に特色を発揮された。私もずいぶん皆さんに教えられた。「文学研究」はこの機能を充分発揮すべきだと思う。

九大を離れて、もとの古巣がなつかしいままに、思い出話をくりのべた。文学研究会と、その紀要とが、いよいよ発展されんことをいのる。(四二、一〇、二五)